

《2013年4月例会報告》

【日 時】2013年4月20日（土）16:00～18:00（その後「ルン」～22:30ごろ?）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】サロン2002のこれまでとこれからを語ろう！

－ サロンin臼杵&公開シンポin名古屋&月例会200回を振り返って

【演 者】中塚義実（筑波大学附属高校／サロン2002理事長）

【参加者（会員）9名】阿部博一（日本サッカー史研究会）、安藤裕一（筑波大ハンドボール部OB）、牛木素吉郎（ピバ！サッカー研究会）、奥山純一（Web エンジニア）、熊谷建志（会社員）、笹原勉（日揮）、高田敏志（株）アレナトーレ、中塚義実（筑波大学附属高校）、本多克己（株）シックス、

【ルンからの参加者】白井久明

【報告書作成者】高田勝敏

サロン 2002 の

これまでとこれからを語ろう！

サロン in 臼杵&公開シンポ in 名古屋

月例会 200 回を振り返って

中塚義実（筑波大学附属高校／サロン 2002 理事長）

<目 次>

I. サロン 2002 の “これまで” と “これから”

II. サロン in 大分・臼杵

III. 公開シンポジウム「U-18 フットサルを語ろう！」

I. サロン2002の“これまで”と“これから”

いよいよサロンも月例会 200 回目ということで、「サロン 2002 のこれまでとこれからを語ろう！」をテーマに、私のほうからお話をさせていただきます。“これから”の部分に関してはこの後の「ルン」で議論できればと思います。

1997 年から「サロン2002」と名乗るようになりましたが、前身の JFA 科学研究委員会のサブグループである「社・心グループ」時代を含めると、月例会は 200 回では収まらなくなります。記録上は 1997 年 4 月 18 日にお茶の水女子大体育館にある杉山進研究室で第 1 回月例会を開催したことになります。第 2 回も同地で行い、第 3 回は集まったものの台風の影響で中止となり、いまの「ルン」である「カリンカ」へそのまま移動しました。これを第 3 回月例会として数えています。ただの飲み会でカウントされているのはこの回だけでして、その後延々と月例会を続け、気がつけば今回が 200 回ということになりました。

2009 年の第 150 回月例会のときにも似たようなテーマで月例会を開きました。偶然にも、その時も 4 月の月例会で、しかも「サロン in 熊野」で中村覚之助の故郷を探る旅の報告会を兼ねていました。今回と大変よく似た状況です。このときもサロンの歩みを振り返っています。12 年間で 150 回も月例会を行ったわけです。

会費導入以前の 1999 年 1 月に、「NPO 法人／サロン 2002 のこれまでとこれから」と題して月例会を行いました。次のような議論が為されました。

<サロン2002のこれまでとこれから>

1999.1.29.月例会配布資料より (項目のみ)

I. サロン2002の歴史

1. 「サッカー研究会・調査班」時代 (1970～80 年代前半)
2. 「社・心グループ」時代 (1980 年代後半～1990 年代前半)
3. 「サロン2002」時代 (1997.4～)

II. サロン2002の現状

1. ロコミによる“会員”募集。「来る者拒まず、去る者追わず (時には追う)」
→ 会員数は増え続け、会員の質も多様化する
2. 会費を徴収していない
→ 財源がないため建設的な活動が展開できない
いつでもやめることができる = 責任なき“ボランティア”活動
3. そのくせなかなか活発に活動している

III. サロン2002の将来—中塚案

1. サッカー／スポーツ界の情報交換・人的交流の場
2. サッカー／スポーツ界のシンクタンク
3. 実践する集団
スポーツの発展のためには、プロ意識を持ったボランティアと、ボランティアスピリッツを持ったプロが共に必要。片手間ではできない。

結論：意識改革と組織改革を進める。今のままでは不十分であり、もったいない。

まずは「任意団体」としてできることをする → 2002 年までに NPO 法人化

- 1) 会員資格の明確化と会費の徴収
- 2) 規約づくり
- 3) 継続的な財源の確保 (事業の明確化)
- 4) 事務所・事務局員の確保

このような議論を経て 2000 年度から会費を徴収することになったわけです。

話を少しだけ現在に戻しますと、先ほどの理事会でも話し合わせ、総会で最終的な確認となりますが、本年度のテーマとしてサロンのNPO法人化を掲げていこうと思っています。抱えている問題はその当時と似ているのではないかと思います。

これまでのサロンの歩みをざっと振り返りますと、サッカー界の劇的変化とインターネットの普及がかなり大きなファクターとしてあったわけです。1997年からサロン2002としてリスタートしましたが、2000年から会員制を導入しました。

「サロン2002の活動」を、HPに掲載されている文章からみていきます。

サロン2002のあゆみ

JFA科学研究委員会のサブグループ「社・心グループ」が前身
(1980年代後半から定期的に活動)

↓

- ◆サッカー界の劇的変化
 - ・Jリーグ発足
 - ・2002年FIFAワールドカップ招致活動～開催
 - ・フットサルの誕生
- ◆インターネットの普及
 - ・全国各地の“同志”がネットワーク化
 - ・「ネットワーク」を「フットワーク」につなげるマインドと活動

↓

「サロン2002」としてリスタート(1997年度)
2000年度より会員制導入(一口会員は3,000円。それ以上を求める)
2010年度より会費は3,000円/年(それ以上は寄付金扱い)
2013年度は全国に180名以上の会員が
主な活動は、月例会、公開シンポジウム、(いわゆる)出張サロン等

サロン2002の活動 (HPより) (2000年4月2日に一部修正(2002年3月1日))

1. 月例会

月1回行われる月例会は「情報交換の場」であり「人との出会いの場」です。運営は、参加費1,000円をもとにした独立採算制。参加費は発表者も支払います。支出は、発表者謝金10,000円、報告書作成者謝金5,000円、会場使用料5,000円とし、残りは全体会計に納めます。筑波大学附属高校で月例会を行った場合、会場使用料は不用なのでこの部分は積み立て、合宿などの経費に充てられます。通信費は全体会計から支出します。月例会のテーマは会員が持ち回りで出し合います。研究成果、実践報告だけでなく、困っていることや何とかしたいと思っていることなどテーマは何でも構いません。話題提供者にとって月例会は「自己PRの場」でもあります。参加者は「肩書や立場」を超えて、一個人として参加してください。自己PRや自分の仕事のネタ探しが主目的の参加はお断りです。もちろん、結果的に「肩書や立場」の部分に活かされることは全く問題ありません。むしろ、サロン2002で得たことは、様々な形で社会に還元してください。

多くの方がディスカッションに参加できるように、発言はできるだけ簡潔にお願いします。話題提供者にとって少しでもプラスになるような建設的な意見・情報が飛び交う月例会が理想です。テーマと発表者の意図にもよりますが、月例会は基本的に、結論を求める場ではありません。さらに検討を進めて何らかの結論を出したい方は、プロジェクトを立ち上げて取り組んでください。月例会の内容は、「サロン2002通信」を通して会員にお伝えするとともに、ホームページに全文掲載します。報告書は発表者自身が事務局、あるいは希望者によって作成されます。作成者には5,000円が謝金として支払われます。

当時は「合宿」というものが想定されていて、また実際に行われていました。また「発言は出来るだけ簡潔に」という一文がありますが、本当に色々な人が、さまざまな業界から参加されていて、自己PRのためだけに来る人がいるような時期があったため、それを制限するものとして記載されています。2000年4月に一部修正となっていますが、ワールドカップ共催の少し前で、Jリーグバブルは弾けたけれども別の意味でのサッカーバブルが引き続き起きていた頃だったのかなと推測されます。

また、サロンの月例会は「シュートを打つかどうか（結論を求めるのか）」が話題になったことがあり、「月例会は基本的に、結論を求める場ではありません。さらに検討を進めて何らかの結論を出したい方は、プロジェクトを立ち上げて取り組んでください。」との一文が記載されています。プロジェクトについては同じく HP に以下の様に記載されています。

2. プロジェクト

会員は誰でもプロジェクトの発起人になることができます。プロジェクトメンバーは会員でなくても構いませんが、会員の紹介が必要です。プロジェクトは基本的には独立採算、自主運営で進めてもらいますが、会員の合意が得られれば、全体プロジェクトに発展することもあります。会費の一部をプロジェクト活性化のために活用することもあります。

プロジェクトのうちいくつかは、サロン 2002 から独立して、法人格を取得して活動を展開することになるかもしれません。その場合サロン 2002 は、人と情報の部分においてできる範囲でサポートします。

現在でも予算上にプロジェクトの項目が残っていて、主に公開シンポジウムに当てられています。以前は「月例会活性化プロジェクト」を設け、会員にアンケートを送るなどしてリサーチした上で改革案を提案するといったこともしていました。また、社会的にインパクトがあったのが「フットサルプロジェクト」ですね。フットサル連盟を組織するか否かといったころの話で、21 世紀型のスポーツ団体のあり方をテーマに冊子を作り、さまざまところに配布しました。「プロジェクトのいくつかは、サロン 2002 から独立して…」といった記載もありますが、その当時はサロンそのものが事業主体にはならず、サロンの活動の副産物として出来たものが事業の主体なることを想定していました。

3. 合宿・お出かけ・出張サロン

通常の月例会とは異なる場所、時間帯で例会が開かれることがあります。宿泊を伴う“合宿”と、伴わない“お出かけサロン”です。いずれも参加者の自己負担で行われます。

これに対して、全国各地へサロン 2002 のメンバーが出向く活動を“出張サロン”と呼び、合宿と区別します。出張サロンの経費は、受け入れ側またはサロン 2002 が一部負担します。“出張サロン”を積極的に行い、全国の同志とのネットワークを構築したいと考えます。

公開シンポジウムについてはどこにも記載がありませんが、公開型の月例会のことです。公開シンポジウムは 2001 年度の「FIFA コンフェデレーションカップ総括シンポジウム」から始まっています。ワールドカップ開催に向けて何ができるのか、何かしなくては、ということが動機でした。2002 年度は「FIFA ワールドカップ総括シンポジウム」で、「ささえる物語」を東京で、「観戦と交流の物語」を神戸のファッション美術館で開催しました。2003 年度は「2002 年を超えて—地域で育てるこれからのスポーツ環境」ということで、DUO リーグの紹介等を行いました。立教大学で開催された 2004 年度の「toto を活かそう！」も充実した内容で

サロン2002 公開シンポジウム

- 2001年度 ... FIFAコンフェデレーションズカップ総括シンポジウム
「2002年とその先へのメッセージ」
- 2002年度 ... FIFAワールドカップ総括シンポジウム
「ささえる物語」「観戦と交流の物語」
- 2003年度 ... 2002年を超えて
「地域で育てるこれからのスポーツ環境」
- 2004年度 ... totoを活かそう！
- 2005年度 ... クラマーさん、ありがとう！
- 2006年度 ... 2006年 ドイツで感じたこと
- 2007年度 ... サッカー観戦を楽しもう！—スタジアム編
- 2008年度 ... 地域からみたJリーグ百年構想
- 2009年度 ... 2019年ラグビーワールドカップ日本大会を語ろう！
- 2010年度 ... 育成期のサッカーを語ろう！
- 2011年度 ... 『高校サッカー90年史』を語ろう！
- 2012年度 ... U-18フットサルを語ろう！

した。この回の冊子の後半に、サロンの歴史をまとめたものを掲載しました。2005年度はデットマール・クラマーさんが来日され、2006年は横浜開催で「2006年 ドイツで感じたこと」。2007年度の「サッカー観戦を楽しもう」は青学会館で開催、2008年度は宇都宮さんが地域リーグやJFLを取材していた事をヒントに開催した「地域から見たJリーグ百年構想」、2009年度ははじめてラグビーを取り上げ、2010年度は全日本学連とのコラボレーションで、デンソーシンポジウムとして堺のJ-GREENで開催しました。2011年度は既に出版されている『『高校サッカー90年史』を語ろう!』。そして先日の「U-18 フットサルを語ろう!」と続いてきました。毎年毎年やっているとその当時の状況もわかり、積み重なるといいものだなと感じます。

同じように「出張サロン」にも歴史があります。いろいろやりました。

1998年の鹿島から「出張サロン」と呼んでいるのですが、そのころアントラーズにいた長岡茂さんがアントラーズの歴史を語ってくださったのと、宇都宮さんが「平成14(2002)年への提言」と題して、2002年をどう迎えるのかをテーマに議論しました。自分たちの月例会を鹿島でやった形でしたが、地元での懇親会の後に宿泊し、翌日のミニサッカー大会に参加しました。蹴散らしたか蹴散らされたか、二日酔いで覚えていないような状況でした。その後、笠松運動公園に車で移動し、ジョルジーニョの引退試合だったと思いますが、天皇杯の筑波大学対鹿島アントラーズ戦を観戦しました。

1999年度と2000年度に続けて新潟で開催しているのは、小島裕範氏が立ち上げた「アライアンス2002」という市民団体との連携です。新潟は2002年ワールドカップの開催地に決まっていたにもかかわらず地元はまったく盛り上がり欠け、何とかしようと動いているのは通勤族の人ばかり。地元の人にどうやってサッカーを伝え、盛り上げるかということで、我々サロン“正規軍”が新潟に乗り込んでいったのが1999年度です。“正規軍”にはサポティスタの浜村真也さんや、当時totoの準備をしていた川井寿裕さんもいたと思います。そのときに「東京では個人参加型草サッカー/コート固定型フットサルをやっている」という情報を伝えたところ、翌年には「木曜日の8時にアルビレックスのフットサルコートに行ったらみんなボール蹴れますよ」という「もくはちクラブ」になっていて感心しました。2000年度の新潟は「もくはちクラブ」に参加した後に交流会を持つという内容でした。1999年には掛川にも行っています。掛川でサッカークラブをやっている人が企画をしてくれて盛大に行われました。

その後は資料にあるとおり、いろんなところでやっています。そして2006年にはついに海外へ進出しました。牛木さんの提案で、「サッカーなら11番だろう」ということで、フランクフルト中央駅の11番出口での待ち合わせです。しかしその日の午前中、時間があつた私は新幹線に乗ってケルンの大聖堂を見てきたのですが、帰りの新幹線に乗り遅れ、2時間も皆さんをお待たせしてしまいました。川のほとりのパブリックビューイングを楽しみ、市内のアップルワインの店でただひたすら飲んだのですが、楽しかったですね。フランクフルトは実は2日あって、もう1回は地元のスポーツクラブを視察するという内容でした。いまフォルトゥナ・デュッセルドルフの日本人デスクを開設して働いている瀬田元吾氏に通訳をやってもらいました。

2007年度の高知では「成田十次郎先生に聞く」を、トリムカップの際に開きました。2008年度は「出張サロン」を岡山・金沢・那智勝浦と3回もやってしまいました。その反省(?)で、しばらく開催しませんでした。

先日の大分・臼杵、そして名古屋で行ったシンポジウムが久々の「サロンin〇〇」でした。2006年にアップルワ

いわゆる「出張サロン」- サロンin●●

(1996年度の伊豆今井浜、1997年度のJヴィレッジは「合宿」)

- 1998年度 ... 鹿島
- 1999年度 ... 新潟、掛川
- 2000年度 ... 新潟
- 2001年度 ... 清水、神戸
- 2002年度 ... 刈谷、(神戸=シンポジウム)
- 2003年度 ... 大分、(両国=お出かけ)
- 2004年度 ... 伊香保、成岩
- 2005年度 ... 名古屋
- 2006年度 ... フランクフルト
- 2007年度 ... 高知
- 2008年度 ... 岡山、金沢、那智勝浦 > 行き過ぎ!
(2009年度の川崎は「お出かけ」、2010年度の堺はシンポジウム、2011年度はなし)
- 2012年度 ... 大分臼杵、(名古屋=シンポジウム)
(2014年度にサロンin!リオデジャネイロ?)

インを飲みながら話し合っていた「2014年はリオデジャネイロで焼鳥屋を出そうよ」と言っていたのを「サロン in リオデジャネイロ」としてあります（笑）。

サロン2002の月例会では、そのときどきの“これから”について何度も取り上げています。

月例会で取り上げられた、サロン2002の“これまで”と“これから”

◆1998年度

- ・NPO法について／サロン2002のこれまでとこれから（1999年1/29）

◆1999年度

- ・サロン2002(Ver.2000～2001)について（2000年3/27）

◆2000年度 ... 会員制導入。規約を整備し「総会」を開く

- ・サロン2002のホームページをどう活かすか（2001年1/25）

◆2001年度

- ・2002年（以降）のサロン2002を考える①②③（2002年1/29、2/27、3/25）

注）③はワールドカップの“物語”をいかに集めるか(ワールドカッププロジェクトII)

◆2002年度 ... FIFA ワールドカップ韓日大会

◆2003年度

- ・GE社の「シックスシグマ」手法を用いたサロン2002の課題の検討（5/24）
- ・サロン2002の月例会を活性化するには（サロン2002活性化プロジェクト）（6/26）
- ・いまいちどサロン2002のあり方を考える（2004年2/26）

◆2004年度 ... 月例会100回記念

- ・サロン2002のあゆみ月例会100回記念パーティ（2005年3/31）

◆2005年度 ... 「総会」を月例会回数に加えるようになる

◆2006年度 ... 「サロン2002」10周年

- ・サロン2002の10年を振り返る①-10年間（10年以上）の環境の変化とサロンの変化（12/19）
- ・10周年記念パーティ（2007年2/24）

◆2007年度

- ・サロン2002にバーチャルなコミュニティは必要か（7/19）

◆2008年度 ... お宝映像上映会兼忘年会はじまる

- ・サロン2002のホームページをリニューアルしよう（6/27）

◆2009年度以降

月例会で取り上げられることはないが、総会では必ず議論に

1999年1月29日については先ほど話にあった通りです。

1999年度には、「サロン2002（Ver.2000～2001）について」ということで大いに話し合わせ、これが2000年度の会員制導入につながっていきます。

2000年度にはホームページの活用方法についても議論しました。

2001年には「2002年（以降）のサロン2002を考える」と銘打ち、サロン自体がテーマとなり、2002年FIFAワールドカップへ向けて何ができるか、ワールドカップ後のサロンの方向性をどうするかについて3回も月例会で討議しました。3月25日の第3回目は、ワールドカップの物語をホームページに集めようという議論でした。アイデアとしては良かったのですが、なかなか定着しませんでしたね。

2002年度はFIFAワールドカップ日韓共催大会があり、翌2003年度は、笹原さんが紹介して下さった手法（シックスシグマ）でサロンの課題の検討を実施しました。

このように、今後のサロンのあり方をどうするかについては、その都度真面目に考えていました。2004年2月26日には“いまいちどサロン2002のあり方を考える”と、くどいほど月例会で話し合っていました。

2004年度には月例会100回記念、2006年度はサロン10周年記念でそれぞれ振り返り企画を行い、2007年度には「サロン2002にバーチャルなコミュニティは必要か」、2008年にはホームページのリニューアルをテーマに月例会を行っています。それ以降、月例会でサロンのあり方が論議されることはありませんでしたが、総会では必ず議題に入っ

て意見交換しています。先ほどの理事会でも話し合われたサロン2002の“これから”については以下の通りです。NPO法人化の是非を問う段階から、NPO法人化にいつ踏み切るのか、「いまでしょ！」というのがいまのサロンの段階であろうということが理事会で話し合われました。

サロン2002の“これから”

- ◆事務局機能を強化したい
“プロ意識を持ったボランティア”と、
“ボランティア精神を持ったプロ”で運営してきたが、
いまのままだと、現状が限界
いま以上を求めるなら、事務局機能の強化は不可欠！

- ◆組織としての姿がみえるようにしたい
・他の組織と連携を図る際に、法的にも対等の姿で対応したい
「いったいあなた方は何者ですか？」に応えられるように
・補助金等の受け皿となれるようにしておきたい

- ◆事業の担い手としての“サロン2002”となるためには…
・月例会、公開シンポジウム、出張サロンなど、これまでやってきた事業は可能
→より規模を拡大して実施できる
・“ゆたかなぐらし”を志向する良い活動の担い手となることは可能か？
例) DUOリーグの事務局をサロン2002が担うことは？
例)「リサイクルプロジェクト」「スキッププロジェクト」を担うことは？

↓
「NPO法人化」にいつ踏み切るか

II. サロン in 大分・臼杵

サロンの今後に向けての話は、フリートークの後、ルンに移動して引き続き行いたいと思いますが、これからはこの春開催された2つの行事を振り返っていきます。

現地に行くと“臼杵藩の春巡り”というイベントの中に竹腰重丸を語る会が掲載されているパンフレットが市民会館等に貼られていました。牛木さんと浅見さんと私は前日の3月22日に大分に到着しました。空港では宮明さんが出迎えてくださって、大分スタジアムに行くことができました。大分スタジアムは当初「ビッグアイ」の呼称でしたが、「九石ドーム」を経て、いまは「だいぎん（大分銀行）ドーム」となっていました。トリニータの練習場である、だいぎんフットボールパークはスタジアムに隣接していました。貴賓席からピッチを見せて頂きましたが、皇太子殿下がいらした際にスタジアムの雰囲気を感じたいということで貴賓席全面の窓ガラスを外してくれないというリクエストがあり、大変な工事を行い、また元に戻したそうです。

その日の夜には、地元の人とトリニータのサポーターもよく来店するという居酒屋で懇親会を行いました。古い看板がかかっている懐かしい感じのあるお店でした。

非常に幸運だったのですが、大分で出張サロンを行う旨を皆さんに連絡したところ、土谷享さんから返信があり、“どんどこ大相撲”を3月24日に大分市内で開催するとのこと。時間があれば是非行きたいと思っていたのですが、会場は、我々が泊まっていたホテルから徒歩5分の場所だということがわかり、朝食後に牛木さんと、熊本から来た岩本さん（名古屋でのシンポジウム演者）をお誘いして会場に行ってきました。トイレトペーパーで作った大きな優勝カップは3本足でした。八咫鳥つながりで不思議な縁を感じました。

その後臼杵市内へ入ったのですが、鉄橋に書かれていた文字が「これより城下 温泉なし 温心あり」と、印象的でした。会場の臼杵市民会館の入口をくぐるとすぐに、リーフデ号の模型が飾ってありました。オランダから出航し日本に流れ着いた、三浦按針も乗っていたリーフデ号は臼杵市に漂着したとのことで、日本とオランダの国交

400周年記念は長崎よりも臼杵でまず開催されたそうです。

竹腰重丸さんの娘婿である浅見俊雄さんから頂いた写真をパワーポイント上に掲載しています。この（写真を指し）竹腰重丸のキックフォームと、こちらはチョウ・ディンと、いまの早稲田大学のサッカー部を創った、東京高等師範附属中学校卒業生の鈴木重義さんです。ビルマ人のチョウ・ディンは、現在の東工大の留学生として来日し、飯田橋のあたりで下宿していたそうですが、走り幅跳びとサッカーの選手だった彼が日本ではサッカーをする機会がなく、寂しく思っていました。茗荷谷の駅前、いま筑波大学東京キャンパスと文京区スポーツセンターがある場所に東京高等師範学校があり、そこでボールを蹴っている人がいるということを知り、一緒にプレーをするようになり、高等師範とその附属中の生徒が彼からフットボールを学び、子どもの頃から一緒にサッカーをやっていた鈴木さんが早稲田のサッカー部をつくり、その指導をチョウ・ディンに要請し、第1回インターハイで優勝します。竹腰さんも旧制山口高校の一員としてインターハイに出場していて決勝で早稲田に敗れたのですが、その辺りから竹腰さんはチョウ・ディンの交流が始まったようです。この写真は早稲田がインターハイで優勝した際の写真で、チョウ・ディンさんが真ん中に、鈴木さんが前列に写っています。こちらは東京大学が昭和3年にリーグ戦3連覇したときの写真で、カップを持っているのが竹腰さんです。

竹腰重丸さんの背景を簡単に説明しますと、1906年2月15日に大分県臼杵市に生まれ、臼杵中学校に入学し、2年生時に大連一中に転校してフットボールに出会い、リベラルな校風のもと様々なことを学び、旧制山口高校に進学。その年に東京帝国大学が主催する旧制高校インターハイが始まり、その決勝戦を早稲田高等学院と戦いました。その後、東京帝国大学に入学し1926年に関東大学リーグ初優勝、その後帝国大学はリーグ戦6連覇を達成します。この写真はベルリンオリンピック日本代表チームですが、コーチであった竹腰さんもユニフォーム姿で写真に写っています。次の写真は、戦後メルボルンオリンピック予選に監督として参加された時の写真で、日本対韓国が引き分け（2-0、0-2）で本大会進出チーム決定のため、両チームの監督とキャプテンが出てきて抽選を行っているシーンです。この写真がその時に竹腰さんが引かれたメルボルン行き決定のくじです。現在は浅見さんのお宅にあり、将来的にはミュージアムに寄贈するという話をされていました。選手、コーチ、監督、そして団長として色々な国へ遠征されたのですが、こちらの写真は当時まだ国交のない中国で試合を行った際の写真で、周恩来の横に竹腰さんが写っています。こちらは韓国遠征での一枚で、選手とデットマール・クラマーが写る後ろには兵隊がずらっと並んでいて当時のピリピリしていた様子がうかがい知れます。

牛木さん、竹腰さんについて補足等いただけますでしょうか。

牛木：当時の日本のサッカーは走って蹴るといった感じでしたが、チョウ・ディンが来日し、はじめは早稲田高等学校を指導し、その後巡回指導で山口高校に来た際に竹腰さんと知り合うわけです。その際に、これからはチョウ・ディンのサッカーを取り入れなければならないと悟り、チョウ・ディンの下宿を訪れ、また全国巡回指導について行き、自分でチョウ・ディンの技術、ボール扱いはまたは考え方を身につけ、そして実行します。帝国大学の6連覇に、最初の3年は選手として、あとの3年は指導者として関わりました。当時の関東大学リーグは、日本で一番レベルの高いリーグでしたので、帝国大学は日本で一番強いチームでした。また日本代表チームをキャプテンとして率いた1930年第9回極東大会では、それまで勝ったことのなかった同大会（極東大会は主に中国、日本そしてフィリピンの3か国が参加、第1回大会を除き中国が9連覇）において、神宮での中国戦を3対3の同点で終え、両国優勝となりました。これは日本サッカー界における国際大会の初優勝となります。その2年後のロス五輪を目指していましたが、ロス五輪ではサッカーは行われず、先ほど写真が出たベルリンオリンピックにコーチとして参加し、当地でWMフォーメーションを初めて目にし、日本代表に取り入れスウェーデンに勝利しました。前述のように監督は鈴木さんでしたが、実際の指導者は竹腰さんでした。そして戦中はボルネオに派兵されて政治に関わらなかったので公職追放にならず、戦後サッカー協会の役員として日本サッカーの再建に尽力されました。このように選手、指導者、役員全ての面で活躍し、日本サッカー史上もっとも多くの、そして重要な仕事をした人だと最近私は思っています。

中塚：臼杵市長も参加して下さったシンポジウムの内容は以下の通りです。

※ 報告書作成者注

サロン in 臼杵に関しては、手元にある資料が少ないので、重要であろうと思われる箇所乃至は資料がなくても様子がわかるであろうと思われる箇所の記述にとどめてあります。別途報告書が作成されるということで、詳細はそちらをご参照ください。

<p style="text-align: center;">サロン 2002 in 大分(臼杵) 『竹腰重丸を語る会』 臼杵市市民会館小ホール 3月23日(土)午後1時45分～午後4時50分 講演「竹腰重丸伝—古武士の風格をもち、技の奥義を究める」 浅見俊雄氏 講演内容:①生い立ち「さむらい」の家庭と躰 ②大連一中「自立、自由」服部(西内)精四郎校長 ③プレーヤー、指導者としての業績 ・チョーデインに学ぶ ・極東大会優勝 ・ベルリン五輪コーチ</p> <p>パネリスト 日本サッカー協会顧問 浅見 俊雄 スポーツジャーナリスト 牛木 素吉郎 豊後歴史探究会代表 吉田 稔</p> <p>コーディネーター 筑波大附属高校教諭 中塚 義実</p> <p>シンポジウムの話題 ①日本サッカー史上、最高の偉人(牛木) ②臼杵の歴史と環境(吉田稔) ③日名子実三と八咫鳥 「神武天皇と八咫鳥」像 臼杵商工会議所 武口秀樹さん</p>

中塚：机の上には杉でできたボールが置かれていますが、これは当日の午前中まで宮明さんが合宿をしていた中津江村の方から頂いた物です。反対側には日本サッカー協会のエンブレムをデザインした日名子実三が作成した、神武天皇の頭に八咫鳥が乗っている像が置いてあります。これについては阿部さんに説明していただくのがよいかと思います。

阿部：この像は臼杵商工会議所の武口さんが臼杵市でイベントをした際に、市内の古道具屋さんがイベントに提出されたもので、昭和11年、帝国軍人交流会40周年の際に日名子実三が作成したものということです。臼杵の方々には日名子実三が、日本サッカー協会のエンブレムをデザインしたことは当然ご存知で、今回竹腰重丸のシンポジウムあるということで、会場に持ってきてくださいました。

中塚：臼杵が竹腰重丸と日名子実三の故郷であり、八咫鳥との関係は我々の裏テーマでもあったわけですが、今回神武天皇の頭に八咫鳥が乗っている像に巡り会えたのには本当にびっくりしました。

阿部：浅見さんや牛木さんの世代には八咫鳥の話は学校で習っていたのですが、我々の世代ですとそういったことは教えてもらえず、那智勝浦に行って初めて知るという具合ですので、今回の出会いにはびっくりしました。

牛木：補足すると、昭和6年に日本サッカー協会が、当時有名なデザイナーだった日名子実三にエンブレム作成を依頼し、今も使われているデザインを作成したのですか、日名子実三が古事記あるいは日本書紀に出てくる、神武天皇に陰路の先導した八咫鳥をモチーフにデザインしたことは明らかなのですが、何故か日本協会はそれを認めたがらず、現在もホームページ上には中国の古典“淮南子”に出てくる太陽の中のカラスをシンボル化したと書いてあります。我々がこれは八咫鳥がモチーフではないかと意見すると、とってつけたように「三本足のカラスは日本書紀にも出てきて日本人にはなじみ深いものです」と書き足しました。しかし日名子実三が神武天皇の八咫鳥をモデルにしたことはこの像を見ても明らかなのですが、何故か日本協会はホームページを直さないで、これが出てきた時にはまたひとつ証拠が出てきたと、内心ほくそ笑んでいました。

中塚：武口さんが持ってきてくださった時点では、この像を日本協会に「寄贈したい」という話だったのですが、シンポジウムの報告書案を武口さんに送ったところ、「寄贈したい」という部分を訂正してほしいという返答が帰ってきました。色々な事情があって譲ることができなくなったので、「展示したい」と訂正してほしいということでした。いずれにしてもとても価値のある像ですね。

シンポジウム終了後に、臼杵城址を散策しましたが、桜がとてもきれいでした。そこにあった日名子実三の作品“廃墟”の前での一枚です。前列中央に移っている岩崎さんは日銀大分支店の支店長で、どのグループにも属さず単独で参加されました。どうも大分の新聞に今回のシンポジウムの記事が載ったようで、浅見さんが大分にいらっしゃるのであれば是非参加したいと、ちょうど我々が空港についた時に宮明さんに電話をされてきました。岩崎さんが浅見さんとどういった関係かという、海外に留学されていたこともあり英語が堪能だったということで、岩崎さんが学生の頃、海外から審判がサッカーの試合で来日した際のアテンドや通訳をアルバイトとしてされていて、その頃のお知り合いということでした。阿部さんが後日、岩崎さんについてすごいつながりを見つけたんですよね。

阿部：当日のお話では1985年にユベントスがトヨタカップに来た際、岩崎さんは早稲田大学の3年か4年生で、浅見さんと知り合いだった高校時代の恩師を通じて通訳のアルバイトを始めたとおっしゃっていましたが、後日岩崎さんについて調べてみると、その前年の84年欧州選手権の際にバックパッカーとして賀川さんと共に試合を見に行っていたことが当時のサッカーマガジンに出ていたことを見つけました。

中塚：すごいつながりの連続ですね。私の右隣の方は、今回の実行委員長を務めてくださった臼杵の市会議員で、整骨院を開かれている大塚さんです。私は腰痛の状態で飛行機に乗り、2時間シンポジウムに参加していたので腰が痛かったのですが、翌朝彼から連絡があり、マッサージをしましょうかと言ってくれました。臼杵に来てマッサージを受けられるとは思いませんでした。

阿部：“廃墟”について補足ですが、実はオリジナルは石膏で造った塑像で、いまの日展にあたるのでしょうか、帝展で賞をとり、日名子実三の彫刻家としての第一歩となったそうです。現在オリジナルは大分大学の図書館にガラスケースに入って飾られているとのことでした。

中塚：小堀さんと福島さんについて牛木さんからご紹介頂けますか。

牛木：一番前に座っている小堀さんは、サッカーの切手収集に関しては日本一の方です。2002年にはデパートで展覧会も開催しましたし、著書も2、3冊出ています。小堀さんは日名子実三のマークに興味を持たれていて、今回はそれを中心に参加されたということです。私の後ろの黄色いシャツを着ている方は福島寿男さんで、国会図書館に勤められている方で、サッカーの文献に興味をもたれていてサッカーの書籍をたくさん読み、サッカーの歴史を研究されています。多くの知識をお持ちで、系統的に調べられています。おとなしい方であまり目立たないのですが、例えば八咫鴉が中国由来ではなく、やはり神武天皇が由来ではないかということをお初めて私に教えてくださいましたのは福島さんです。彼は竹腰重丸と日名子実三両方に興味があり、今回わざわざ休みをとって参加されました。

中塚：お手元のツアー報告の最後には、参加者の感想が掲載されていますが、その中に小堀さんと福島さんの感想もありますので、あとで読んでみてください。こちらはその日の親睦会会場の春光園です。武家屋敷を料亭風に改築して宿泊もできるようになっています。久家本店相談役、久家源次さん 96歳とともに盛大に親睦会が行われました。

牛木：久家さんは東大に進まれ、スキー山岳部に所属されていたのですが、谷川岳にスキー山岳部が管理していた東大の谷川寮があり、そこに向かう汽車の中で竹腰重丸さんと出会ったそうです。当時竹腰さんは東大の総務課長で、谷川寮の大学側の責任者でした。今回竹腰さんが取り上げられるということで30分だけでも顔を出したいとのことでしたが、30分どころではなく最後までいっしょに、宴会まで参加され元気いっぱいでした。先ほどの岩崎さんに福島さんの件もそうですが、やはり人間同士のふれあいがあると色々新しいことが起きるものだと、非常に感動しました。

中塚：翌日は臼杵市内ツアーとなりました。臼杵市内に3つあるという熊野神社の一つには、驚いたことに船出を先導する八咫鳥の絵馬が奉納されていました。案内して下さった方も、この絵馬がいつ奉納されたのかはわからないとおっしゃっていましたが、明らかに3本足のカラスです。私も八咫鳥が飛んでいる絵は初めて見ました。この絵馬をよく見てみると、左上には太陽、右下は松林と思われる陸地があり、そして海の上を航行する船を3羽の八咫鳥が先導しているように見えます。このような絵馬に出会えたことには大変驚きましたし、色々話を聞いていると、高千穂の辺りから出発して、記録によればすぐに海に出て臼杵の辺りに立ち寄り、瀬戸内経由で大阪のほうへ行き、そこで上陸できないから熊野へまわり、那智勝浦で上陸し八咫鳥に導かれて大和の国へ、ということのようですが、その一方で山の中を通り臼杵から船出したという話もあるようで、臼杵の伝説の中では神武天皇が通った場所があり、地名として残っているということもあるそうです。

阿部：臼杵で一番有名な東熊野神社は東神野（ひがしこうの）という場所にあり、そこでは1000年以上続くお祭があると、臼杵の観光協会の方がおっしゃっていました。

牛木：絵馬というものは馬だから絵馬というのですが、船を描いた船絵馬というものも全国にはたくさんありますが、私が知る限り、通常船絵馬は船を大きく描いて航海の安全を祈願しているものですが、これは船がどこにあるのかわからないくらいで八咫鳥が先導しています。これは非常に珍しいものだと思います。絵馬の専門家に話を聞いてみたいですね。

中塚：野曝しのような状況で飾られていました。

阿部：ずいぶん寂れたところでしたね。

中塚：今回のシンポジウムでは臼杵の人たちにも、良い意味でインパクトを与えることができたと思います。私たちの街にこんなにすごい人がいたのだと、地元の方が再確認してくれていたし、我々も発見の連続でした。竹腰重丸およびその時代の人々のことを、もっと広く伝えていかなければいけないと強く感じました。そういったわけで、竹腰重丸の人生の後半、サッカー界で何を成し遂げたのかに焦点を当てたシンポジウムを東京で開催しようと思っています。牛木さん、その後話は進んでいますでしょうか。

牛木：サッカー協会が協力姿勢になってきたので、サッカーミュージアムの講堂で開催しようかという話になってきています。戦前の日本のサッカーの歴史は、最初に東京高師から始まり、東大の黄金時代、ベルリンオリンピックをはさみ早稲田の黄金時代、そして慶応といった具合に進んでいったので、この4つの学校でそれぞれ戦前編を、例えば早稲田であれば鈴木重義さんを取り上げ、2年がかりで4つのシンポジウムを開催しようというのが私の案なのですが、ミュージアムの津内さんという人はもっと壮大で、サッカー協会の100年史を作る材料としてもっと系統的にやろうと考えています。明治の始め、サッカーが国内に断片的に入ってきた時代から始まって、東京高師から東大へと歴史的順番でおっしゃっていますが、まあそのうち収まる場所に収まるでしょう。

中塚：YCACと筑波大学の交流戦が、1904年の第1回から数えて今年が110回目ということで、メディアを巻き込んで大々的に行おうという計画があるのですが、このシンポジウムとうまくコラボレーションできたら面白いだろうという話が、先ほどの理事会でありました。

Ⅲ. 公開シンポジウム「U-18 フットサルを語ろう！」

中塚 その1週間後に名古屋で公開シンポジウムが行われました。この話を最後にして「ルン」へ向かいましょう。
「U-18 フットサルトーナメント 2013 開催にあたって」ということで、「U-18 フットサルを語ろう！」という題名でした。だいたいサロンのシンポジウムは、言いつ放しでいい人が出てきて好きなことを言うというのが基本なのですが、今回は日本サッカー協会常務理事・フットサル委員長、日本フットサル連盟専務理事、熊本県サッカー協会フットサル委員長と、しかるべき方にご登壇いただきました。準備段階では、先ほど話があったように「サロン 2002 って何？」ということから始まるので、このような方が出てくれるのだろうかという危惧もありましたが、皆さんオープンで、特にこの時期だからこそ U-18 のフットサルを語るという趣旨を理解してもらったのだらうと思います。快く引き受けてくださり、実りの多いシンポジウムになりました。
まずは会場のテバ・オーシャンアリーナです。「世界一のフットサルアリーナ」と書きましたが、本多さん、間違いないでしょうか。

本多：間違いありません。世界一のフットサル専用アリーナです。施設の規模を含め、あらゆる意味で世界一ではないでしょうか。本当に素晴らしい施設なのですが、例えばハンドボールやバレーボール等の他種目には使わせていません。

中塚：私も昨年のプレ大会の際に初めて行ったのですが、こんな施設が名古屋のあおなみ線の終着駅にあるのかと、大変驚きました。「開発されていないお台場」といった雰囲気のある場所に建っていて、この奥には幕張メッセのようなものもあり、これから開発されていくのだろうなという印象を受けました。昨年の時点では「大洋薬品オーシャンアリーナ」だったのですが、大洋薬品がイスラエルの製薬会社 TEVA に買収されて、「テバ・オーシャンアリーナ」と名称変更されていました。この写真は開会式で大立目さんが挨拶をされている様子ですが、この

ようにメインスタンドとバックスタンドがあります。開幕戦は関東代表の武相高校対瀬戸内高校でした。武相高校は関東代表決定戦で国学院久我山を大熱戦の末に下したのですが、武相高校はフットサル部で、大友さんという方が監督を務められています。武相高校にはサッカー部もあるのですが、サッカー部の監督も同じ名前の大友さんです。かつて読売クラブにいた大友さんが監督を務められています。フットサル部の大友さんは神奈川県フットサル委員会の第2種部会長もされていて非常に研究熱心な方です。関東予選では、サッカーで大学進学が決まっている3年生で構成されている国学院久我山高校と戦うにはどうしたら良いかとさんざん研究されました。守備を固めてセットプレーに勝機を見いだす戦術をとり、見事にセットプレーで得点し、終了間際に追いつかれたものの延長戦で突き放し、2対1で代表権を獲得しました。実は初戦の対戦相手である瀬戸内高校も、予選で作陽高校を下した広島チームです。本多さん曰く、この試合が事実上の決勝戦ということでしたね。

本多：大会前はそうではないかと考えていました。作陽高校は昨年の準優勝チームで、各地のU-18大会全てで優勝しているようなチームです。一方の瀬戸内は、今年サッカーの新人戦中国地方準優勝チームで、広島ではナンバーワンのチームですと胸を張って言っていました。そのサッカー部のトップの11人を連れて名古屋に来たということで、本当に個人の能力は非常に高かったです。

中塚：私も注目して観ていたのですが、武相高校がこの施設に気後れしたのか、いつもの武相高校らしくなかったですね。

本多：両チーム共すごく緊張していましたね。

中塚：瀬戸内が3対2の逆転勝ちでした。

本多：瀬戸内は広島では、観音や皆実に追いつき今や追い越そうとしているチームです。

中塚：アリーナ内にはサブアリーナもあり、天井が低くてたまにボールが当たってしまうのが気の毒なのですが、ピッチの材質はメインアリーナと同じで、このように小さなスタンドもついていて、同時進行で大会が開催されました。高校生の大会ということでチアガールとサブのメンバーが高校サッカーや高校野球のような応援をしてくれていました。こういった応援はプレ大会のときにはなかったですよ。

初日の試合がそろそろ終わろうかという頃に、サロンメンバーが会場にやってきました。賀川さんはサロンリュックを背負ってお越しになりました。シンポジウム会場の作りが面白くて、ピッチ上に演者が並び、聴衆はスタントに着席して奥のスクリーンにスライドを映しました。ただ、スクリーンに投影するのがなかなかうまくできず、最終的にはPCの画面をカメラで写し、部分的に拡大しながら投影するかたちとなりました。開始時刻が17時半で19時半には終了です。高校生を連れてきている人たちは、夕飯をどこでとるのかといった問題があり、参加チームで残ったのは熊本県U-18フットサル選抜のみでした。参加者が少なかったのが残念ですね。

シンポジウムのねらいと進め方はスライドにあるとおりです。

シンポジウムのねらいと進め方

【シンポジウムのねらいと内容】

参加者が「U-18フットサル」の意義を感じ、次のアクションにつなげる。そのために

- 1) 歴史を共有する
- 2) 本大会の意義を共有する
- 3) 課題を共有する ことを内容に盛り込む。

【シンポジウムの進め方】

1. 「U-18フットサル」の“これまで”
2. 「U-18フットサル」の“いま”=本大会の位置づけと意義
3. 「U-18フットサル」の“これから”

私が大枠を作り、それに対して演者の方にコメント頂くかたちで進めました。

現状のフットサル国内競技大会の一覧を見ると、U-18年代のオフィシャル大会だけが抜け落ちていることがわかります。これにはさまざまな背景があるのですが、高校生は大人の大会に出るとい形式でこれまで進んできました。

東京都では先行して2000年度末からU-18年代大会についての議論が始まりました。私も東京都フットサル委員会のメンバーですし、同じくメンバーの徳田さんとの話し合いから始まったので、そういった意味では、U-18フットサルはサロンの中から出てきた事業であると言えるでしょう。そして2001年度の夏に、東京都ユース(U-18)フットサル大会を開催する話になりました。この頃には、並行してサッカーのリーグ戦構想が広まっていたので、サッカーのリーグ戦のオフシーズンにフットサル大会を開催すればサッカーチームも参加できるという構想でスタートしました。2001年度の第1回東京都ユース(U-18)フットサル大会には「第51回 社会を明るくする運動」の冠がつけました。ラジオ体操等を行っている総務省関連の事業ですが、これがついてくれたお陰で、小金井市総合体育館を借りることができました。体育館をいかに確保するかは未だに頭を悩ませる問題ですが、直近の課題は、ホーム会場のように使用している、東洋の魔女が優勝した駒沢屋内球技場が、今年の秋冬に改修に入ることです。少し前には東京体育館が改修工事をしていた時期があり、バレーボールやバスケットの人たちが会場を求めて、我々がフットサルで押さえていた会場にどつとやって来るようなこともありました。会場確保はいつまでも付いて回る問題です。

U-18大会を始めてどうなってきたかといいますと、はじめの頃は「やんちゃな奴ら」が「多様なチームで」参加していたので責任能力のある大人の帯同を求めています。大人の帯同義務はいまも続いています。そのうちレベルが上がってきて、「もっとやりたい」という選手が増えてきました。その一方で、東京の取り組みを全国に発信、そのうえで今後の方向性を探っていくというスタンスが生まれ、ちょうどその頃始まったJFAのトライアルFA制度を利用して報告書を作成したり、各都道府県でフットサルをやっている人たちのジョイント・ミーティングで都内の活動を紹介しました。神奈川の友大さんは、東京の活動を参考に神奈川でもU-18年代の大会を始めたとおっしゃっていました。熊本もジョイント・ミーティングでの東京の報告を聞いて始めたそうです。やはり外部への情報発信には、波及効果があるのだと実感しています。

その後東京では「もっとやりたい」選手のためにリーグを作ろうという動きが始まります。それについては本当に自主運営できるのだろうかという不安はありましたが、2007年と2008年にプレリーグを実施し、2009年より、東京協会主催の公認リーグとして展開しています。明確なビジョンを掲げないまま進行しているので、なかなかうまくいかない面はありますが、なんとかここまで運営できています。

都内で立ち上げ、育てた「はじまりの10年間(2001~2010)」を経て、「横と縦への広がり志向する次の10年間」を構想する中、2011年9月に本多さんが私を訪ねてこられ、将来的に公式大会となるような全国プレ大会の準備が始まり、昨年2012年3月の「サッカーキングカップ U-18 フットサルトーナメント2012」が実施されることになりました。全国9地域からチームを選出し、決勝は作陽高校対名古屋オーシャンズU-18の対戦で、延長戦の末6対5で名古屋オーシャンズが初代チャンピオンとなりました。参加チームを見ると、作陽をはじめ、松山工業に京都橘と、選手権に出場したチームもあり、指導者が柔軟な頭を持っているところは選手権でも結果を出せるのかなと思いました。

2012年3月の大会を終えたところでJFAの会長が変わり、北澤豪氏が高校生フットサル北澤CUPというかたちでU-18フットサルと関わるようになります。各地で競技会も増え、U-18フットサルにとっては追い風が吹いている状況になりました。だからこそグラウンドデザインを描くことが重要だろうと考え、先日のU-18フットサルトーナメント2013につながりました。今年度は主催に日本フットサル連盟、後援に日本サッカー協会に入ってもらい、よりオフィシャル性を出した形式で展開しました。各地域から、できれば予選を行ってもらおうよう依頼した結果、4県で持ち回りとなった四国以外の地域では予選を実施し代表チームが選出されました。関西代表の宝塚FCについては本多さんから説明して頂きましょう。

本多：宝塚 FC はサロンメンバーの高原さんが、東京でのフットサルの活動の話を中塚先生から聞いて、フットサルは大会ごとの登録でよいということで、U-15 までしかチームのない宝塚 FC の、普段は高校の有力チームでプレーしている OB の 3 年生たちでチームを結成し、関西予選を勝ち抜いて全国大会に進出してきました。サロン発の非常にフットサルらしい経緯のチームと言えます。

中塚：開催地枠には昨年度優勝チームの名古屋オーシャンズがエントリーしましたが、松蔭高校のイケイケフットサルに敗れてしまいました。松蔭高校のプレースタイルは、ボールを持った選手がとにかくドリブルを仕掛けて、ドリブルができなくなったラパスをするといったものでした。フットサルを専門にプレーしているチームは、そういったプレースタイルに対する防ぎ方を知らないで、オーシャンズも屈してしまったのだと思います。松蔭高校は本大会でもイケイケフットサルで勝ち進み、決勝戦まで進み、瀬戸内高校に敗れて準優勝でした。瀬戸内も松蔭もサッカー部です。最後まで「小さなサッカー」といった印象でしたが、試合を重ねるにつれ徐々にフットサルらしくなってきました。

サロンのメーリングリストでもお知らせした、麓さんの教え子が運営するリベロ津軽と帯広大谷の 3 位決定戦を戦った 2 チームと、新潟の中越高校は雪国のチームで、11 月頃からは体育館で練習をしています。今回はサッカーボールではなくフットサルボールで練習をして今大会に臨んだと言っていました。今大会は雪国のチームが活躍しました。3 位決定戦は引き分けに終わり、片方のチームに後日カップを郵送することになったのですが、当日持って帰るチームを決めるために、本多さんに行司をお願いしてじゃんけんで決めたところがこの写真です。遊び心のある、非常に気持ちのいい大会でした。

「U-18 フットサルのこれから」についても当日話し合いました。乗り越えなければいけないことはたくさんありますが、前向きに捉えると、フットサルが突破口となり、学校単位のスポーツに風穴を空ける等、色々なことができるのではないかと感じているところです。

本多：誰が？のところだけ少し話をさせて頂いても良いですか。この部分が一番議論になっているのですが、「U-18」とは誰のことなのかについて、シンポジウムで賀川さんが発言してくださりました。サッカーが高円宮杯で他のスポーツに先立って高校とクラブチームと一緒に大会に参加できる環境を創出しているのに、なぜフットサルで高校に戻す必要があるのか。フットサルも JFA が主導するのであれば、高校とクラブが共存すべきである。もしも高体連が主催で大会が実施されるのであれば、連盟の中で議論がされるべき問題ですが、今更身別の大会を開催することはないだろう、という内容でした。

昨年優勝した名古屋オーシャンズには、高校に通っていない選手も在籍していました。我々は高校フットサルを作ったつもりはないので、U-18 年代の大会ということで育てたいと思っています。

中塚：以上が、公開シンポジウムの内容でした。報告書は別途作っていますので、後日郵送致します。

サロンの今後については、場所を変えて引き継ぎ議論したいと思います。本日はありがとうございました。

「U-18フットサル」のこれから

■いつ？

シーズンは？ → サッカー(既存の競技会)とどうすり合わせるか
曜日(は)？ 時間帯(は)？ → リーグ戦を行う際に調整が必要

■どこで？

体育館？ 人工芝？ → 学校体育館をどうやって開拓するか

■誰が？

サッカー部員？ フットサルに特化？

「U-18」とは誰のこと？(高校生？第2種？ 18歳未満？以下？)

■何を？ = 「フットサル」にはどのような条件が必要？

ボール？ ルール？

■どのように？

公と私の違い(は)？ 担い手(組織)は？ 高体連との関係(は)？ ³⁸

続きは「ルン」で…